

論文作成支援報告書

上野 俊行（アジア）

博士論文題目：

「ベトナム社会におけるバリアフリー——東アジア三都市の公共交通機関のバリアフリー化と比較して」

要旨：

ベトナムにおいて障害当事者が社会参加をするための手段としての公共交通機関を重視し、そのバリアフリー化を論じる。ベトナムの障害者の割合は他国と比較して高いにもかかわらず、バリアフリー化は容易には進展していない。この理由として、以下の3点が考えられる。①政府が国家の経済政策を優先させるため、社会政策が優先されない。②バリアフリー化は社会における少数である障害当事者を対象とするため後手になる。③政府側も、社会からの需要がない状態では、少数ユーザのためのバリアフリー化は費用対効果の面からも積極的ではない。このような社会環境であるため、障害者の権利や障害の社会モデルを根拠にした政策は受け入れられがたい。このため、ベトナムの地域文化を念頭に置き、障害者政策が社会全体の利益になるもの、あるいは社会政策が障害者を包摂するものを考え、ベトナム社会に適合しうる政策からバリアフリー環境の構築に具体的にアプローチする。

ベトナムの状況を知るために、先進国のバリアフリー化のプロセスを鑑みて、ベトナムのバリアフリーを法制度（政府の観点）、バリアフリーのハード（事業者の観点）、バリアフリーのソフト（事業者の観点）、障害者の生活状況（障害当事者の観点）の4つの観点から、筆者自らの車椅子で実地走行とインタビューによる調査を行った。また、心のバリアフリー（市民社会の観点）を知るために、アンケート調査も行った。さらに、ベトナムの今後のバリアフリー化の方向性を考えるにあたり、ベトナムの特徴を有している北京（社会主義国家の首都）、バンコク（社会運動によりバリアフリー化を実現した東南アジアの都市）、台北（バイク社会の都市）の3都市を比較の対象とした。先進国である欧米のバリアフリーの比較を行わなかった理由は、経済力と文化の差異が大きいことが目立ち、比較の焦点が曖昧になるためである。

概して、バリアフリーは、エレベータやスロープなどのハードを設置できる経済力によって解決できる一過性の問題とされがちである。これに対し、筆者は、バリアフリー環境を構築するためには、市民社会がバリアフリー化による社会全体の大きな変化を深く理解することが重要であると考えている。本論文を通じて、ベトナム社会におけるバリアフリー化の始まりから現在に至るまでの変遷を見直すことにより、今後進むであろうと考えられるベトナムの公共交通機関のバリアフリーの将来像を描き出すことを試みる。さらに現時点で考えられるベトナムのバリアフリーの将来像に対して、ベトナムには何が必要であるかを考察する。そして、本論文の考察がベトナム社会全体に影響を与えるバリアフリー環境として再認識され、障害当事者の社会参加の可能性を向上させるために貢献できることを目的としている。

ファイナルコロキウム実施日：平成25年9月27日（金）

最終審査日：平成26年1月23日（木）

審査委員：古田元夫（地域文化研究専攻、主査）、谷垣真理子（地域文化研究専攻）、岩月純一（言語情報科学専攻）、長瀬修（立命館大学）、澤田ゆかり（東京外国語大学）